

エドモンド・ブランデン考

A Study of Edmund Blunden

貝 嶋 崇

Takashi KAIJIMA

Edmund Charles Branden (1896 - 1974) is widely known as a British poet and literary critic, especially known for the poems on the subject of the First World War's military experience, but rather a great teacher was he in Japan. And it is not only the students, but also Japan itself that the poet and teacher finally loved. In this paper, in reference to the relation between Blunden and Japan, his two visits to Japan and his circumstances are mentioned to recognize how and why he had a special attachment for Japan, which were grievously destroyed by the World War II.

序

エドモンド・チャールズ・ブランデン（1896-1974）は第一次世界大戦の従軍体験を題材にした詩で知られるイギリスの詩人・文芸評論家として広く知られているが、日本においては英語教師であった。そして、教え子たちだけではなく、最終的には日本そのものを愛した詩人でもある。本論では、そのブランデンと日本をつなぐ部分について焦点を当て、二回の来日とその事情などを考察し、原爆の被害にあった広島に対してどれほどの思い入れがあったかを考えた。

ブランデンと日本

ブランデンと日本をつなぐ切っ掛けはどんなものだったのかについては、資料によると、最初にエドモンド・ブランデンが日本に興味を抱き始めたのは子供時代だった言えそうだ。ブランデンが子供の頃に気に入っていた夕焼けの並木道を描いた風景画が、日本の風景画だったそうである。¹ また、子供の頃に学校の近所には黒髪の少女が住んでおり、その少女が日本人だったらいい。少年期からの日本とブランデンとの関係はこれまであまり語られてはいなかったけれども、そうした子供時代の体験が、ブランデンは日本への面影に対して影響を与えたことは否めないし、漠然とはあるが、そこはかたない淡い郷愁に似た思いを日本に対して抱くようになったのかも知れない。だからこそ、ブランデンと日本とはそれほど強い絆で結ばれるようになったのではなかろうか。

最初の来日

ブランデンは二度、来日している。最初は1924年から3年半の間、そして二度目は1947年からのことである。ブランデンの初来日は、この原稿が書かれるよりも約20年以上あまり前のことだった。当時の東京は、関東大震災からまだあまり回復していない時期だった。二度目の来日も、第二次世界大

戦の直後であり、東京は大空襲で荒れた状態だった。ブランデンの来日は二度共に、国土が大きく荒廃していた時期だったと言える。

1924年3月28日に箱根丸という蒸気船でイギリスを出発し、マルセーユ、シンガポールを経由して東京に着いた。出発に際しては、友人や当時の奥さんのメアリーらが見送ったと言われている。日本に到着した日は、少し蒸し暑い朝だったという本人の記述が残っている。ブランデンはそれから約3年半の間日本に滞在することになった。

ブランデンが英国を離れた理由は、伝記作家のウェブは経済的事情とイギリスでの就職が思うようにいかなかったという説をあげているが、無論それもあるだろうが、やはり第一の理由としては、友人の東京大学の斎藤勇教授（1887-1982）から招聘を受けたのが大きな理由と考えていい。ブランデンと斎藤が友人になった切掛けは、1923年に斎藤が英国滞在中にラルフ・ホジソン（1871-1962）から紹介されたのが始まりである。ブランデンは斎藤をジョン・キーツの研究者として、また紳士として、キリスト教徒として一流であると高く評価していた。斎藤は留学中に東大とのゆかりの深いロバート・ニコルズ（1893-1944）の講義をすすんで熱心に受講していたことがある。1924年1月に斎藤はブランデンへの書簡で、東京帝国大学外国人講師ロバート・ニコルズの後任として同大学での外国人講師の職を年900ポンドで打診していたのだ。ブランデンとニコルズも文学仲間であった。1919年からロバート・ニコルズとは近所に住んでいる文学仲間としてとして交流していた。しかし、日本に赴任することになれば、妻のメアリー・ディンズそれに二人のこども達とも別れねばならなかった。しかしながら、それでも最終的にブランデンは日本での教授職を選んだのである。

日本へ向かう船上から片手で、ブランデンはメアリーに別れの手を振りながら、もう片手にはシェークスピア悲劇集を持っていたと言われる。それは家族よりも日本についてから、深めようとする学問を選んだことを象徴的に表しているようだ。ブランデンの日本への上陸は、最初は大阪からだった。1924年4月に大阪へ着いて、そこから東京へと向かう。東京では、暫定的に最初に市河三喜（1886-1970）の敷地の裏にある、かつては土居光知（1886-1979）が住んでいた屋敷に住むことになる。斎藤勇や市河三喜などの同僚などとともにブランデンは東京帝国大学で英文学を学生に講義をするようになった。東京大学の講義では18世紀の詩やロマン派の評論家を担当した。しかし程なく、学生たちがチャールズ・ラムの名も知らないことを知りイギリスでの大学との格差を痛切に感じるとともに、大学では文学の教授というよりむしろ英会話教師としての役割の方が大切な役割だと期待されていることを理解し始めると、しばらくは失望感を感じその感情も隠せなかったようだ。

無論、最初から日本そのものに対して興味を覚えて来日したわけではないので、当初はずいぶん日本の文化習慣にも疎かったであろうし、当時の日本を襲った災害についても全く知らなかったのも、そうした理解不足からでもあろうが、相当な不満があったようだ。例えば、自分が講義する建物についてもそうである。来日の1年前の1923年9月に関東大震災が発生し関東地方での死者行方不明者は、10万人を超えていた。また、建物の被害は、37万戸以上に達していた。当時としては甚大な被害状況だった上に、まだ1年たらずしか経っていなかったこともあり、大学の建物などは教育に関する復興については後回しになったのだろう。従って、最初にブランデンが案内されたのはバラックの学舎だった。仕方なくイギリスの大学を離れ、新天地を夢見たブランデンにとっては、最初は厳しい現実だった。その上さらに、自分の話す英語がほとんど通じないという不便をその後、嫌と言うほど味わうことになった。自らの思いが相手に対して言葉でうまく伝わらないもどかしさは、言語の研究家としてはおそらく耐えがたい屈辱だったと想像される。またその一方で、周りの学生たちが話す日本語がほとんど理解できないブランデンにとって、コミュニケーションがほとんどとれないというストレスは、想像以上に苦しいものだったのではないだろうか。だからこそ、日本での生活でストレスを多くためることになった。その様子が、当時書いた英国の友人宛の書簡からよくわかる。彼は、自分が一

人孤立していることやその授業レベルも低いことなど関して多くの愚痴をこぼしているのだ。

しかし、1年ほど経つうちに、日本の独自の文化や独特の学生気質などへの理解が少しずつ深まり、ブランデンは西洋文化への学生らの無知をただ単に嘆くのではなく、むしろそれを理解させるために力を尽くすようになり、『リア王』などの講義ノートを学生のために用意するようになった。ブランデンのこうした変化が学生との交流をさらに促す結果となり、最初の彼の屋敷、そしてその後に住むようになる菊水ホテルなどへ熱心な学生たちが多く訪問するようになった。そこは、さながら読書会等の学生のたまり場となり、いわばプライベートな学舎ともなっていた。そこで、シェークスピア、シェリダン、ゴールドスミス、ハーディなどの読書会や意見交換などを活発に行われた。このようにブランデンは学生らとの知的交流を深めていったからだろうか、当初抱いていた日本の学生に対する不信任は次第にぬぐわれていった。さらには、今度はお互いに深い信頼関係もできてきた。その学生たちの中には曾根保(1896-1976)、阿部知二(1903-1973)、中野好夫(1903-1985)などその後の文壇を代表するようになる優秀な学生も多く含まれていた。彼らはブランデンの思想を日本に伝えた弟子たちといってもいいだろう。むろん、ブランデンの教育活動を支えたのは、自らの研究活動が主だった。最初は教え子のためだったろうが、実はそれにとどまらず、それがブランデン自身にも大きな飛躍の基礎になっていった。イギリスの文芸雑誌への60を越える詩の投稿や、さらには80以上の批評の投稿などがそれを示唆している。

ようやくブランデンは日本の生活に馴染んで、その生活にもゆとりが見られるようになった。その後、日本の文化そのものに対しても目を配り、次第に興味さえ持つようになった。日本でのストレスも次第に癒えていった。その理由として、自分を理解してくれる味方が大勢できたことである。同僚や学生達はもちろんブランデンを尊敬し理解してくれた。また、それ以外にも林秋（以降アキ）という女性の存在が大きい。二人の出会い、一九二五年初夏の軽井沢での夏期講習の時だとされている。その受講生に当時名古屋の中学校英語教師だった林アキがいた。ブランデンよりも7才年上で、英会話が上手な女性だった。言葉がなかなか通じない中で、アキの話す英語は特別流暢だったと言われる。したがって講習が終了しても、その後から二人は東京でも合うようになった。

ブランデンが送った1925年8月29日付けの林アキ宛の書簡が残っている。

あなたとのことを真剣に考えています。またそれについて罪の意識はありません。あなたが受け入れてさえくれれば、わたしは若いままでいられるし、またその思いは永遠です。もちろんこれは長年連れ添った妻への裏切りの宣言でもありません。わたしはただただ必死にあなたとの関係をどうすべきかと考えています。家を出る前に今朝受け取った妻からの書簡をこれに同封します。ともかくそれを読んでみてください。そして、わたしのことをもっと理解して欲しい。妻を傷つけるつもりはまったくないのですが、妻はまだわたしとの関係が終わったとは思っていません。しかし、これでわたしのことをもう少しわかって欲しい。わたしたちの愛はどれほど清らかで美しいものか、そして、それがわたしの生きる糧となっており、独り寂しいときにはそれがどれほどわたしの原動力となっているか。それは生きるためのわたしのお守りです。諸般の事情から、やるべきことを秋口までは実行できないのがほんとに残念です。しかし、どうかもう少し我慢していて下さい。あなたと一緒にいるときには、厳しいこの世のうさから救われます。チャンスさえ頂ければあなたのために何でもいたします。これまでそうであったように、そしてこれからも。²

この書簡からは、ブランデンが妻のメアリーに対してある程度の負い目を感じながらも、一方でメアリーと別れるつもりもないこと、またアキに対しての率直な思いが伝わってくる。それを読む限り、彼はできるだけ彼なりに誠実であろうとしたことがわかる。

1925年の秋には母国にいるメアリーからの書簡もあまり届かなくなっていたことも手伝っていたのかもしれない。ところが、1926年の始め頃から今度は、次第にアキに対しての思いも冷めていくようになる。一方、アキの方は、むしろ何かしらの約束を強く求め始めた。本当に自分を愛しているのなら、英国へ秘書として連れて行って欲しいと懇願した。むろん、それにブランデンもできるだけ誠実に対応した。どれほど反対されようと、アキを英国に連れて帰る約束は守るとか、また証文のようなものまでも書いた。ブランデンはアキを秘書として雇い、経済的に支援をするということ、さらには法的な責任も取ることを約束し、実際その後34年間守った。アキとの出会いは、日本に来て戸惑っていた頃のブランデンにとっては、その寂しい生活の中で一つの喜びだったに違いないことは想像できる。

むろん、上記のことからブランデンに対して不倫をしたという批判をするのは容易であろうが、アキに対する思いはそれほど不真面目で無責任なものではなかったことは事実である。中野好夫は恩師に対する学恩もあるだろうが、ブランデンとアキの二人の関係についての研究に対しては全く評価していない。しかし、ブランデンの個人生活を知る上でアキがイギリスを離れて、最初の一つの心の支えであったことの否定はできない。

一方で、ブランデンは東京帝国大学との雇用契約が切れてから、その後の身の振り方についても考えていた。東大との契約を延長する考えはなかった。教育者としての仕事にブランデンは、ある程度満足していたのだろう。また母国から遠く離れたことで、一層オックスフォードの地への望郷の念が強くなっていた時期だった。無論オックスフォード大学やケンブリッジ大学からのポストの申し出もあったが、教職ではなくもう少し、フリーな職業につきたいとブランデンは考えていたようだ。英国へ戻ってからは、最終的にネーション誌とタイムリタラリー・サプリメント誌で働く契約をした。

1927年7月13日に神戸港からプリマス行きの蒸気船マケドニでラルフ・ホジソンや林アキとともに船上の人となった。

こうして3年半に及ぶブランデンの日本での生活が終わった。いざ英国へ戻ってみると、離れていたものの、はっきりとメアリーに対する愛情を再認識した。しかし同時に、アキに対しての援助も忘れなかった。アキは当初はブランデンの経済的支援を受けて生活していたが、彼の知り合いの紹介で、大英図書館で働くようになった。

英国において、ブランデンはジャーナリストとしての活動を続けながらも、当初の計画とは異なり、1931年10月にはオックスフォード大学のマートン・カレッジのフェローに就任し教職とも関わりを持った。収入を安定するためなのか、それとも日本時代を思い出して、もう一度教壇に立ちたいと思ったのかかわからないが、事実として、13年間もフェローを続けている。一方、文壇では、ジャーナリストとして活躍したばかりでなく、詩人そして文学者として素晴らしい作品を残した。

また、第一次世界大戦に従軍した際には、ドイツとの戦の前線に立ち、その惨状を目の当たりにした。ブランデンは、その経験をリアルに描写している。そこからおそらく、ユニークな平和観と戦争観を持つようになったようだ。むろん戦争そのものに対しては反対であろうが、いわゆる戦を避ける日和見主義を嫌うというものだった。そのために戦争賛成派であると世間から誤解を受けることもあったが、ブランデンは敢えて、そうした誤解に対して弁明をしようとしなかった。それはおそらくイギリス人特有の品格が影響を与えているのかもしれない。

その後、マートンカレッジを辞し、一九四七年のバッキンガム宮殿での園遊会に招待を受けた折にブランデンは外務省から呼び出しを受けた。そこで日本への外交団の派遣の一員になるようにとの要請を受けた。パール・レッドマンや駐日大使ジョン・ピルチャーなどから推薦されたのである。彼らは、ブランデンが教えた日本の学生たちを通じて、彼の日本での影響力の大きさを利用しようとしたのであろう。契約をしていたタイム・リタラリー・サプリメント誌からも許しをもらい、ブランデンはそ

の要請を受諾した。その決意を固めたのは、日本で英語を教え、第二次世界大戦中は日本軍の捕虜になっていたルイス・ブッシュからの強い勧めもあったと言える。ブッシュは「君は日本へ行くべきだ。彼らは君が思う以上に君を必要としている」と励ましたのだ。

1945年8月広島と長崎の原爆投下直後に、彼は以下の書簡を弟ランスに宛てに送った。

まず確実なことは、原爆がなくても日本は3ヶ月で降伏するということが一般的に考えられる。しかし、このように日本を敗戦に追い込めば、ベルシャから先の東洋人はきっこう確信することだろう。それは、西洋文明とは野蛮そのものだ。だからこそ、シェリーやヘンリー・ポーンのような詩人のメッセージを彼らに再び伝えることに手を貸そうとする人間は誰でも、こうした新たな始まりはどんなものでも逃さないだろう。

また、原爆については、その4年後にヒロシマの復活を祈念する詩をみずから書いている。

HIROSHIMA

A Song for August 6th, 1949

Out of the night that covered her
The stricken town began to stir,
Out of bewilderment extreme,
The fierce vexation of a dream,
She raised herself in parching pain;
And no man heard her once complain.

It seemed, of what was gone forever,
Speedily woke a new endeavour;
Out of darkness, out of fire,
Sprang new radiance, new desire;
The stricken city rose to see
Not what has been but what will be.

Hiroshima! no finer pride
Did ever earthly city guide
Thank yours, ----to be the happy nest
Where the glad dove of peace may rest,
Where all may come from all the earth
To glory on mankind's rebirth!

ヒロシマ

1949年8月6日の歌（訳 貝嶋 たかし）

ヒロシマを覆った闇は明け
廃都は再び立ち上がる

極度の驚がくから
夢幻の強烈な苦しみから目覚め
ヒロシマは爛れるような苦痛を受け立ち上がった
一片の不平も口にせずに

永久に失われしものの
再起が始まったかのようだ
漆黒の暗闇から 真っ赤な業火から
新たなる光と夢が飛びだしている
廃都は再起した ここにあるのは
過去と現在ではなく 未来のすがただ

ああ ヒロシマよ
声高らかに
われは感謝する ああ幸せの住処よ
平和の鳩も歓喜のうちにその羽を休め
生きとし生けるものが
人類の新生をことほぐところ

原爆で被害を受けた広島に対する深い同情よりも、むしろ広島に対するエールを感じるが、それはただ広島へ向けられたばかりのものではなく、若い頃から憧れ、そして若い学者となり暮らしていた日本に対して、さらにはその教え子たちへ向けられたブランデンの祈りの言葉のように響く。

また、もう一つそこにメッセージがある。それは、復興を切に願う強い意志である。こうした詩を書くほどのに、日本に対してひとかたならぬ思いがあったと言える。

1945年6月には*The Time Literary Supplement*誌の期限なしのアシスタント・エディターに就任した。ブランデンにとっては念願のジャーナリストとしてのキャリアも極めたと言ってもいい。タイム誌の文芸欄にもたびたび彼は登場するようになった。中でもスウィフトやハウスマンなどについての書評は特に優れているという評判だった。そのように英国において文芸誌のエディターとしてまた、詩人としてその中心的な地位を占めるようになった。

二度目の来日をする前の1931年に最初の妻のメアリーとは別れ、再婚し、その相手はシルバ・ノーマンというアルメニア人の女性だった。そしてまたそのシルバとも別れ、1945年にはクレア・ポインティングと三度目の再婚をしていた。そこで再来日することになった。

1947年11月6日に一行はStrathnaver丸という蒸気船でアルジェ、スエズ運河、さらには、香港を経由し横浜へと向かった。今回の来日は、単身で来日した初回とは異なり、妻のクレアと娘のマーガレットをともなつての来日になった。同年12月6日付けの日記の文面からは、20年ぶりに日本へ戻る感慨と、古い友人や学生達との再会に胸を膨らませるブランデンの有様がいきいきと想像される。³旧知の人々や学生たちにクレアやマーガレットを紹介したいという気持ちも率直に記されている。今回は、日本中に英国の文学を紹介するという目的もあり、文字通り、日本中を講演して回った。北は旭川から南は鹿児島まで、しかも講演の場所は大学ばかりではなく、市民ホールやお寺などでもおこない、聴衆も学生ばかりではなく、そのほかの一般の大衆の前でもブランデンはアリストテレスからマッシュュー・アーノルドについて講演を繰り返した。

二度目の来日ではブランデンは講演がうまくいくことをある程度確信していたようだ。その確信の

理由の一つには、彼を迎える熱狂的な教え子達が待っていることを知っていたからだろう。講演数は最終的に全部で600回を超えた。また、大学などでの講演内容は、それぞれの大学でことになっている。慶應義塾大学では‘Favourite Studies in English Literature,’ 早稲田大学では‘Influential Books’ また法政大学では‘Sons of Light,’ 京都大学では‘Poetry and Science’ 等である。東京大学で行われた‘Addresses on General Subjects, Chaucer to “B.V.”,’ ‘Shakespeare to Hardy’ などの講演はその後印刷され再版を重ねた。無論その講演は著作を意識してされたものではなく、ブランデン自身も wooden homilies (面白くない講話) といって高く評価しているわけではない。次から次へのスケジュールがあり、また講演の準備時間もあまりなかったのも、構成などはじっくりと時間をかけて考えずに講演しているわけであるから、とても自信を持って出版することなどできないと考えるのも無理がない。本として出版するのであれば特段に慎重にしたいと考えていたようだ。そうは言っても、講演の前にはちゃんとメモのようなものに講演原稿を書いて用意するなど、その姿勢から講演は本人が考える以上にちゃんとした立派なものである。もちろん、熟慮して何度も推敲されたものではないけれども、メッセージを伝えるという意味では、本のために推敲された原稿よりも、こうした講演用の原稿の方が、はるかに聞くもののこころを打つわかりやすいメッセージになっていると思われる。

こうした日本での一連の講演は、かつてのイギリス文学関係の同僚や教え子達によって支えられて実現した。土居光知、小倉春市、市河三喜、さらには堀英四郎、曾根保、阿部知二、植田虎雄、酒井善孝、中村勇吉、平井正穂、その他各地で活躍する教え子などに支えられて、講演は大盛況となったのはいうまでもない。なかでも斎藤勇は、一回目の来日の前からの交友で、最も深い絆があった一人である。

ブランデンは家族と共に、日本滞在中はイギリス大使館の構内に居住した。そこで本国での著名人らとも交友を重ねた。彼には講演や原稿の依頼がひっきりなしだったと伝えられている。また英文学の交友関係だけではなく他にも、韓国王室や日本の天皇家とも親しく交流を持った。

一九五〇年には九州大学から、当時のブランデンの詩を集めた *Records of Friendship* という詩集が出版されている。それは一九四九年に九州での講演旅行をした折に、知り合った人々を記した詩集である。九州大学の中山竹二郎教授によって編纂され、九州大学出版から出版されたもので、ブランデンの詩集の限定本である。編者のあとがきにあるように、二度にわたる九州での講演旅行へのお礼を込めた出版物である。最初の方のページには、当時のブランデンとクレア、それから娘のマーガレットの三人が写真に映っている。中央で下を向いているマーガレット、優しい笑顔のクレア、少し頭を左に傾げ陽射しがまぶしそうに目を細めているブランデン。佐賀での講演の折に、撮られた写真だが、講演で緊張しているようにも見えない。どこか温かいものを感じさせてくれる家族写真である。

その冒頭の詩は、クレア宛に書かれたものであるが、手書き原稿をコピーしたものが載せてある。そこには、九州を旅し、そこで出会った人々や風景などの思い出が生き生きと蘇ってくる様を、「記憶の地図を開く」という表現でとても印象的に述べている。他にもブランデンは多くの手書きの原稿を残しているが⁴、これもそれらと同様にとても読みやすく癖のない字で丁寧に書かれたものであり、ブランデンの人柄がそこからにじみ出てくるようである。誠に、ブランデンの巧みで丁寧な調子で、訪れた九州の各地の土地柄などが読み込まれている貴重な本となっている。以下にその詩のタイトルと日付それからそこから読み取れる情報を記しておく。

	詩タイトル	日付	場所	相手	
1	To Claire	1949/12/24			
2	Sakurajima, A Volcano	1949/12/25			
3	Moji on the Sea	1949/5/20	門司	Miyakitsu sakai, Moji City	
4	To a Waltonian in Kyushu	1949/2/16		中山竹二郎	
5	A Modest Scholar	1949/12月		前川俊一	
6	To Mrs. Hirai of Kikusui Hotel	1949/2/16	菊水ホテル	Mrs. Hirai	
7	From the Japanese Inn Window	1949/2/16	菊水ホテル		
8	To Kikuesan	1949/2/16	菊水ホテル	Kikuesan	
9	A Scholar	1949/2/16	菊水ホテル	Shinomiya Kenichi	
10	Evening on the River	1949/10/8	菊水ホテル	Shinomiya Kenichi	
11	Nature Rebels	1949/10/8	福岡	Mori katsuhiko	
12	Lecturing	1949/10/10		President Hisamitus Nishi	
13	The Dean	1949/10/10	佐賀	Takeo Shimaji	
14	And Still the Dean	1949/10/10	佐賀大学	Dean Y. Uchida	
15	Railway Journey	1949/10/9	佐賀	Kaizo Matsuda	
16	Saga Memory	1949/10/9	佐賀	Miss Tomioka	at Dr.Tomioka's old china collection
17	A Signature; A Mizunoe Sept. 13. 1934	1949/10/9	佐賀	A. Mizunoe	
18	Nagasaki Old and New	1949/10/12	長崎	Takeshi Goto	
19	In Nagasaki Harbour	1949/10/12	長崎	Yutaro Ito,	
20	"English Studies"	1949/10/12	長崎	Rikita Norita	
21	The Teacher	1949/10/12	長崎	Katsu Ueda	
22	The Art Student's Other Career	1949/10/12	長崎	Ikuhiro kiya	長崎の高校生、 ブランデンの スケッチを した
23	A Sabbath	1949/10/16	熊本	S.Totoki	細川（水前寺 公園？）
24	Symposium	1949/10/16		Bunji Matsuyama	
25	To Chiekosan	1949/10/23	宮崎	Chiekosan	From Claire and Margi
26	The Autumn Moment	1949/10/25	福岡	Sakae Morioka	
27	At the Departure from Kyushu	1949/10/25		T.Nakayama	Written at Kamei Hotel, Beppu, within an hour of the ship's leaving for Kobe

主に1949年10月に講演旅行で回った九州各地での様子や思いを風景を含めて詩に詠んでいる。編集者の中山竹二郎があとがきで述べているが、ブランデンはとても人格者で優しい心の持ち主で、チャールズ・ラムの作品に触れて彼への恩師への敬愛の念と感謝の念を表している。そして、恩師の熱心な善意によって、自分たちが英文学とイギリス文化の研究を深めることができたことを感謝している。この書一つを見ても、ブランデンのイギリス文学と文化を日本に知らしめた功績の大きさがわかる。

結論

1927年7月13日に神戸港からプリマス行きの蒸気船マケドニで日本を去るにあたって、彼らを見送る学生たちに対して、ブランデンは以下の詩を残している。そのタイトルが、「学生への今生の別れの歌」というものである。この詩からは、日本を去るにあたって、ブランデンの学生たちへのメッセー

ジとまた、自分自身に向けての反省のようなものも見られる。

“The Author’s Last Words to His Students”

Forgive what I, adventuring highest themes,
Have spoiled and darkened, and the awkward hand
That longed to point the moral of man’s dreams
And shut the wicket-gates of fairyland:
So by too harsh intrusion
Left colourless confusion.

For even the glories that I most revered,
Seen through a gloomed perspective in strange mood,
Were not what to our British seers appeared;
I spoke of peace, I made a solitude,
Herding with deathless graces
My hobbling commonplaces.

Forgive that eyeless lethargy which chilled
Your ardours and I fear dimmed much fine gold—
What your bright passion, leaping ages, thrilled
These and all chance offense
Against your finer senses.

And I will ever pray for your souls’ health,
Remembering how, deep-tasked yet eager-eyed,
You loved imagination’s commonwealth,
Following with smiling wonder a frail guide
Who bears beyond the ocean
The voice of your devotion.

惜別の歌

どうか許してもらいたい 最高のテーマを掲げながら
わたしが台無しにして汚してしまったものを、しかもこの無骨な手で
高潔なものを指し示すべきが
ついには妖精の国へのドアを閉ざしてしまった
厳しすぎる介入で
さえない混乱を巻き起こしてしまった

わたしがもっとも尊敬する栄光さえ
陰鬱でよそよそしい見方からすれば

イギリス人の預言者の目に映るものとは異なっており
平和を口にする一方で孤独になり
不滅の愛嬌で
のろまな凡人と付き合う

どうか許してもらいたい 目的を失った無気力を
それが君たちの熱い情熱を冷ましてしまい、おそらく君らの黄金を曇らせた
君ら若き世代の情熱を沸き立たせたものを
まさに奪ったのだ
きみらの立派な正気を

今後も君らの魂の健康を願う
どうか忘れないでほしい 重い責任と熱心な眼差しで
君らがいかに想像力の大切さを愛したのかを
君らは優しい表情で目を丸くしてこの弱々しい助言者に従ってきた
わたしはこの海の果てで
君らの熱い祈りを伝えるのみ

この詩を読む限りにおいて、若干30歳の若い教師が短い日本での教育研究活動を経て、教育上やり残したことや講義の中での反省すべきところなどを後悔の念を持って振り返っているように見える。一つには出航に際して、多くの感情が胸中に一度に去来した結果だと思われるが、それだけではなく、おそらく自分の教え子たちに英文学を教えたその功績よりも、むしろ自分のやり残した部分の多さや、講義の稚拙さのこのことを考えて、その思いから胸を塞がれている彼の様子が窺える。

日本のエリートたちに対して、自分の示した道が本当に正しかったのかどうか自問している謙虚な姿である。自分が学生たちの情熱に水をさしてしまったのではないかと、また、彼らの純粋な思いを汚してしまったのではないかなどである。また、さらには、そうした若き教え子たちの心を、伝えていこうとする強い決意も感じられる。長らく、イギリス文学者として本国イギリスから遠ざかっており、最新の動向よりも、むしろ学生たちとのコミュニケーションから自ら学んだことを、新たな研究の拠り所として、イギリスで発表していこうという決意である。これが、その後イギリスに戻り文芸批評家として名を成したブランデンの基盤にあったのではなかろうか。

幼少の頃より、日本に興味を抱き、そこを訪れ、最初は嫌っていたものの、次第に教え子と交流することで、心を開き、その文化まで好きになった。さらに、そうした愛情溢れるブランデンの思いが教え子の心に種を蒔いた。つまり、そこから生じたのは、単なる英語会話教師ではなし得ないほど大きな影響だった。それは、その教え子を通して、伝えた英文学の真髄であり、そしてその生き方である人生そのものだった。しかもそれは、彼らばかりではなく日本全体に及んだことが九州での講演会の記録からも容易に理解できる。これは彼を評してよく聞く表現だがまさに、「第二の小泉八雲」である。むしろ「第二の」というのは、いささか本人にとっては受け入れられないものかもしれないが、この表現は、まさに教師として教え子ばかりではなく、この日本国中に対して、どれほど多くの貢献をしたかを端的に示している表現だといえるだろう。

註

- 1 Barry Webb, *Edmund Blunden: A Biography*, Yale University Press, New Haven and London, 1990, p. 15.
- 2 Ibid., p. 152.
- 3 Ibid., p. 274.
- 4 筆者もこれまで発表されていない九州大学で行われたブランデンの手書き原稿を持っており、状況が許せば出版する予定である。

主要参考文献

Blunden, Edmund, ed. T. Nakayama. *Records of Friendship*. Kyushu University Press. 1950.
Kirkpatrick, Brownlee. *A Bibliography of Edmund Blunden*. Oxford University Press, 1979.
Mallon, Thomas. *Edmund Blunden*. Boston: Twayne, 1983.

〈キーワード〉

エドモンド・ブランデン, 英語教師, イギリス近代批評, 第一次世界大戦, 原子爆弾

貝嶋 崇 (現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコース)

(2018. 11. 5 受理)

